

半時ほどして仁太郎が目をさますと、さきほどの若者の姿は見えません。そしてウンウンうな
って寝ていた仁四郎はふとんの上に坐って「お父さん、とってもよくなったよ。あしたはすっか
りよくなる。」といました。

仁太郎夫婦は思い出しました。あの若者はお地藏さんであることを。早速雪の中をかきわけて
お地藏様の所へかけつけました。夫婦はびっくりしました。

お地藏さんは雪の中にころがって首がもげていました。

《第二十四話》

姥^{うば} 田^た の 池^{いけ} (野上)

むかし。

野上の里に片倉主水^{しんすい}という豪族が住んでいました。大へん静かな里でしたので主水も里人も幸
せな毎日を送っていました。城のある山を里人は片倉山とっていました。

城下には人々も住みつき、小さな町もできましたが、何分にもせまい谷間でしたので、家来の